

この十年間、日本はいろいろな方面に飛躍的發展を遂げた。技術はだいぶ進んでいて、経済的にももっとも強い国と認められた。と同時に、国の發展にしたがって、日本の社会には、様々な問題がでてきた。その中に、青少年生活の荒廃と非行問題があり、深刻になる一方である。ここまでくると、もう私たちが何か対策を立てねばならない緊急の課題となってきた。それは青少年問題が国の發展に障害になるためだけではない、青年非行問題は悪化し、非行問題は社会の風潮になって、影響が広がっているからである。さらに心配なことは青少年問題が小学生にも影響を及ぼすこと

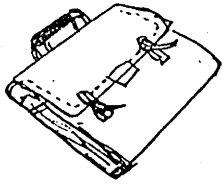
今、非行問題の中心は十代である。では、この年代になぜ非行事件が多く起こるのでしょうか。かれらは、いったい何を考え、何を求めて、非行に走っているのだろうか。

事態の背景と対策を検討する前に、現代の少年問題の焦点から説明させていただきたいと思う。青少年をめぐる諸問題は、万引き、登校拒否、退校、暴力、非行など様々ある。いったい現代の青年非行は、どこへすすむのだろうか。これは、非行が多様化、暴力化、低年齢化がすすんだためである。

つい最近の少年犯行事件の中で、一番衝撃をうけた事件は女子高校生のコンクリート詰め殺人事件だと思う。怖いのは、この事件の残虐性と手段の異常性である。それに、犯行をした四人とも十六才、十七才にすぎない少年達だった。一度も会ったことのない女の子を一か月余り監禁したうえ殺害し、コンクリート詰めにして捨てた事件から、今の若い世代の人達にどんなことが考えられるでしょうか。どんな衝撃を受けたでしょうか。

この事件の主犯少年の家庭背景を見れば、多少、今の十代のもつ悩みがわかると思う。父、母親の仲が悪くて離婚したせいで、少年がお母さんとだけ生活することになってしまった。仕事を持っている母親は仕事で忙しくて、なかなか一緒に食事する時間もなかったそうだ。学校では、小学校からクラスの問題児であった、いつも先生におこられて学校がいやになったそうだった。中学校に進学したら、あまり先輩との仲がうまくいかなかった。そして、人間関係が段々狭くなって、つい暴力団体に入ってしまった。

特別な事例を引用したけど、この事例からいくつものいまの社会問題が現われている。離婚率が高い、夫婦共働きが増えてきた今の日本社会と現在の教育状況は、青少



年の犯行にかなり密接な関係があるのではないかと思う。

ここで、まずこの十代の心理状態についてふれておきたいと思う。この年齢は、子どもから大人になる過渡期にある、人間の一生の中で、もっとも急に心も身体も変わり、活力に満ちた年代である。青年期の成長の特色は、その極めてく不安定で急な変化が起こりやすい点にある。小学校から中学校へ、そして中学校から高校へ進学することに、受験の圧力と新しい環境と人間関係など様々な物事を直面しなければならない。この時期の少年少女たちは、もう子どもではないのだからとっていて、親や教師の指図を受けたくなくなったり、命令され、したがっていることが禁止されるとすぐ反発したりする。口では「もう一人前なのだ」といばってみても、本当は未熟であることを自分でよく承知している。だから困難を当面している時、悩みや願いがある時、けっきょく親や大人に助けてほしい、聞いてほしいと思っているのである。

それでは、この世代は今、どんな世界に囲まれて、どういうふう育てられて成長してくるのだろうか。なぜいま青少年問題が深刻な事態に移り変って来たのだろうか。事態の背景を社会の気風、家庭の雰囲気、学校生活三つの角度から検討しようと思う。

この世代の少年少女が生まれた時、ちょうど日本は高度経済成長の時代に入った。経済の発展にしたがって、日本人々の生活は少しずつ余裕ができた。生活水準が高の上に、日本は消費文化の時代となった。物質にたいする価値観もかわり、快楽を追求する風潮が広がっている現在、青少年の生活や意識が荒廃しはじめた。この世代は物質的に恵まれて育った世代とみてもよいと思う。

大都市のにぎやかな表通りで、夜おそくまで中学生から高校生にかけての連中が、男の子でも、女の子でも集まって大騒ぎする。ちいさいから、親に大切にされ、経済的に余裕があって、ほしがるものなら簡単に手に入れるように育てられるために、豊かになった生活しか知らない。物質に満ち足りた不自由のない日常生活には心配すべきことがほとんどないから、個人の理想や人生の目標などあんまり考えないかもしれない。一方、この段階の若者たちは、好奇心、刺の快感を求める気持ちが割に高いだ。しかも、約束を守りたくない、拒む心理もある。これによって、深夜、交通規則を無視し、車のスピードを出して走る暴走族の出現はいまはもっとも注目される事態となった。

他に気がついたことがある。最近子どもや中学生の言葉は思えないほど乱暴であり、聞くにたえない悪口雑言が飛びかうような評判がある。よく注意してみると、これら

は全部嘲笑漫才の中のセリフそうだ。テレビの放映中に連発されていることもあるそうだ。これを見たら、どう考えるか。つまりテレビ、雑誌、映画などマスコミは青少年に一定の影響をおよぼすことが否定できないと思う。しかし、残念なのは、いまの一番売れている漫才や雑誌や映画は凶暴化、暴力肯定を題材とするものである。そういう風潮が広がって行ったら、少年の成長に悪い影響を与えて来たことも肯定である。

それから、家庭教育は少年の成長に対するもっとも大切だと思う。子どもから大人へ移行する青年期はきわめて人生の中で試練の多い時期である。その時、人生の経験のある、親しい人の指導は彼らにとってもっと大切なこととなる。その理想的な人は、親にちがいないと思う。しかし、日本人の生活様式が段々変わって来た現在、夫婦の共働き家庭が増えている。最近の調査によると、小学校のークラスのうち、パートや臨時工をふくめて、母親が勤めている家庭などを含めて共働き家庭の数は半分以上もでた。昔、父親は外で働き、家庭の経済支出の唯一責任者で、母親は家において、買物から子どもの世話をする事まで全部の責任を持っていた。今、父母二人とも仕事を持つようになったら、子どもの面倒を見る時間もなくなった。子どもは学校からうちに帰って母さんがいないと淋しいのだ。母さんが忙しいので家の掃除や片付けも十分できない。食事の用意する暇もないので、子どもを外食させる。

おたがいが会う時間がすくないゆえに、けっきょく親子の関係は、少しずつ意識してないうちに薄くなってしまった。共働き家庭に非行が多いと認める人もいる。家らしくない家をいやがって、心理的には不安であり、内心は不満にあふれて、家にとくなくなる。それでよく外出したら、勉強を怠る上、外で悪い人に出あって不正の道に入りかねないと思う。また、学校にお昼の時、母さんが家にいる同級生がつくってもらったお弁当を見るとうらやましいなァと思うと、いたずらをしたり、いじめたりすることとなる可能性もある。

次に、いまの青年問題に学校の方はどんな責任を問わなければならないだろうか。学校生活は楽しくないという声が高まって来た。その中にこの数年は高校中退者が急増して、社会問題の一つにもなっている。退学と非行と密接につながっていることを確信している。

日本には教育事業に十分力を入れているが、今日の教育では能力主義、学問では成績だけではなく出身校が重視された。一流の大学をめざすなら一流の高校に入らなければならないようだ。どんなに能力のある生徒にとっても受験勉強はけして簡単なことではない。わりに能力がたりない、抜群でもない成績で二流、三流ランクの学校にしか入れない生徒は心理的になんとなく何をしても他人よりまずいと思ってしまう。自

信を失ってつい向学心に乏しくなってしまう生徒がすくなくないそうだ。どうせ立派な人間になれないと思ってそして嫉妬心から、あるいは無意識的な報復の形で非行の道に入ってしまう例もある。

学校生活に対する態度についての調査によると、全体をとおして約七、八割の生徒が何らかの悩みを持っているそうである。確かに、ふだん学校では問題がないと言われている優秀な生徒が、いつからか学習意欲や自信を失って、内気になり悩みを持つということが多くなっているそうである。なぜそういうことになるのかというと、学習上の問題としては学校におけるテストの結果の不良、単位取得の不足など原因がわかった。健康上の問題としては、夜おそくまで起きていることによる栄養と運動のアンバランスによる心身の疲労持病の悩みがある。

登校拒否や校内暴力が学校における問題だけど、確かに家庭教育と関係ないとは言えない。日本の子どもたちの育ち方がよく過保護と言われる。そのために、自立心が育たず、どんなことも自分本位の習慣がついてしまう。彼らはすべての判断と振舞いの基準を自分中心に置いていることである。自分の感じ方を基点にして自分に都合のよい論理を積み上げていく。そのために、グループの中で誰一人の行動が彼らの基準をはずれると、裏切られたと認める。落ち着いて、不満に耐える能力の足りない子ども達は、すぐ暴力の形で無理矢理他人の個性を干渉して、それを自分に合わせようとしているのである。

今日の青少年問題に関する事態とその背景をここまで分析したら、社会の気風、家庭のしつけと学校の教育における問題はサイクルのように関連して青少年の成長に障害となったことがわかった。非行事件がいろいろあって、そして事件の成因がそれぞれ個別の理由があるが、社会や家庭や、あるいは学校がどれも一つだけ悪いとは言えない。それに、非行事件にどう対処するかというよりも、非行を防ぎ、子育てどうするかの方がもっと大切な課題である。防げる方法を研究するには、まず家庭と学校の協力を得なければならない。

家庭生活には、親としてどんなに忙しくても子どもとの話す時間をつくってあげてほしい。ゆっくりと子どもの話を聞き、親が自分の生活上の経験でも子どもに聞かせたら、子どもの成長に対するかなり有益な参考になると思う。それに、共働き家庭に非行が多いということを前に分析したが、その中に、共働きを始めたことを機会に、子どもの教育としつけを強化しようと努力する家庭もある。というのは、割に積極的親は、共働きて忙しいので、子どもが協力して家事をすることを「訓練」する。家事労働を分担させ、仕事の中で子どもたちがいままでわからなかった自分の能力や可能

性を見つけだすこともできるものである。しつけのよい家庭では、決して非行に走るような子どもを育てていないことは確である。親は皆、わが子が立派な人間になることを待望していることはよくわかる。しかし、勉強の上に適切な指導が十分である。もし子どもの能力を無視して無理矢理勉強させたら、逆効果となってしまいうに限定している。

一方、学校の方はどんなことをしたらいいのかと言うと、教師の指導性はもっとも大事なことである。学校における指導は教科の指導、受験勉強の指導だけを指しているのではない。生活指導上の教育と道徳とも両方をしっかり執行しなければいけないのである。それに、学校内でくつろげる雰囲気をつくりましょう。同級生の間の競争をできるだけ避けてほしい。もっと趣味の生活をさせたり、運動をさせたりして、楽しいバランスをとる学校生活をおくらせることは一番大切なことだと思う。

子ども達が大人になる成長過程のなかで家庭生活と学校生活は彼らのすべてだともいえると思う。子どもの将来は父母と教師のあつかい方がカギを握っている。そして今の十代の子ども達は日本の将来をになう存在である。私が見て感じた日本はとても将来性のある国である。そのために、もっと明るくもっと立派な子どもを育てましょう。

